

帝国としての「中欧」構想
——第一次大戦期を中心に——

板橋拓己（成蹊大学）
takumi@law.seikei.ac.jp

0. はじめに

* 関心：「地域（リージョン）」及び「地域主義（リージョナリズム）」とナショナリズムとの関係
⇒「帝国」との関連は不可避

* 事例：第一次大戦期ドイツの「中欧」統合構想
⇒目標：「中欧」構想の「帝国性」を考える ←①論理分析 + ②受容分析

1. ドイツ現代史と「中欧」

1) 「中欧」とは何か

* 「中欧（Mitteleuropa）」 ←歴史的・政治的概念 / 近代ドイツ史の「キー概念」[Brechtfeld 1996]
・1980年代の復活 ←ミラン・クンデラら「東欧」出身の反体制知識人の発言 cf. Busek hg. 1986
⇒東西ドイツ統一、欧州における冷戦構造の消滅、EUの東方拡大 cf. 戸澤 2003

* 「中欧」の多義性・両義性 [Le Rider 1996]：多文化共存のユートピア？ ⇔ 汎ゲルマン主義？

* 先行研究：マイヤーらの先駆的業績（概念史）[Meyer 1955; Droz 1960]
⇔ドイツ帝国主義研究 esp.フィッシャー『世界強国への道』[Fischer 1967]
⇒冷戦終結後の百花繚乱 e.g. Stirk ed. 1994; Plaschka hg. 1995; Erbödy hg. 2003; Thoß hg. 2006
←欧州統合史の文脈 e.g. Stirk 1996 + ハプスブルク再評価の潮流

2) ドイツと「中欧」

* 戦後ドイツ史学における「中欧」の忌避、あるいは忘却
①ナチズムの問題 →「中欧」のタブー化 [Ash 1989]
②冷戦の問題：「西側結合（Westbindung）」→「中欧」「東欧」への眼差しの閉却 [川合 2003]
e.g. 「特有の道（Sonderweg）」論争 ←ドイツの「西欧」に対する意識を問題 [松本 1999]
⇒80年代以降の変化：but 政治的色彩が強い e.g. Schlögel 2002
⇒「中欧」とドイツとの関わりを史的文脈の中で冷静に考察する必要性

2. 「中欧」の夢——フリードリヒ・ナウマンの『中欧論』

0) ナウマン『中欧論』の重要性

* ナウマン（Friedrich Naumann, 1860-1919）
：近代ドイツ自由主義の代表的人物、ヴェーバーの生涯の友人 Cf. Heuss 1949; Theiner 1983 etc.

* 『中欧論 (Mitteleuropa)』 (1915年10月) ← 「中欧」という語を普及させる [篠原 1996]

←半年で10万部のベストセラー / 国内外で多大な反響

*英・米・仏・伊・洪・瑞で翻訳 (日本では小野塚喜平次や建部遯吾が紹介)

→ 「彼 [ナウマン] 以後、中央ヨーロッパをめぐる議論は否応なしに 1915年の『中欧論』に立ち戻らざるを得なくなった」 [Le Rider 1996]

* 『中欧論』の対象: 「オーストリア=ハンガリー二重君主国とドイツ帝国との結合」

1) 「戦争の果実」

・ 「戦争の共同性」: 中欧はいまや「共に闘う一つの生き物」 ⇒ 「戦争が中欧精神の創造者となった」

・ 「中欧」を規定するもの: ① 「塹壕」 ② 「封鎖」の経験 → あとは統合への「決断」のみ

◎ ナウマンの「中欧」= 「戦争の果実 (Kriegsfrucht)」: 世界大戦がもたらした運命共同体

2) 戦後国際秩序の展望

・ 国際環境の変容

: 「主権とは、世界史的な決断をする自由を意味するが、それが地球上のきわめて少数の場所に集中されている。...大経営と超国家的組織の精神が政治を捉えたのである」 [cf. アーレント 1972]

← 「交通・通信の時代」と「中央集権化された軍事技術」の帰結 [cf. Carr 2001]

⇒ 戦後の国際秩序を形成するのは、もはや旧時代の産物たる国民国家ではなく、ナショナルな範囲を超えた「スーパナショナルな大国家 (übernationaler Großstaat)」

← この要件を満たすのは米・英・露

⇒ 重要なことは「中欧」 (= 「ドイツの世界同盟」) が「第一級の世界経済強国の陣営」に入れるか否か

← 国際政治のアリーナにおいてドイツが権力主体であり続けることに対する強迫観念

3) 「中欧」の実現に向けて

a) 宗派とナショナリティの問題

・ 「中欧」を宗派・ナショナリティ問題に介入しない政治体として構想

・ ユダヤ人の役割の重視: 「中欧」の統合にはユダヤ人が不可欠と主張

・ ナショナリティ問題を「オーストリア的に考える」 → オーストリア社会民主党への高い評価

・ 「民族自決」の否定 ← 中央ヨーロッパの歴史的背景

⇒ 「少数民族に対する友好的な思考法」「言語の境界を超えたりベラリズム」を要求

: 「中欧は、その中核においてドイツ的であるだろうし、自ずとドイツ語という世界言語・仲介言語を使用するであろうが、...全ての参加者の言語に対して譲歩と柔軟性が示されなければならない。」

b) ドイツ的資本主義と「中欧経済folk」

・ ドイツは、個人主義的資本主義を超え、「第二段階の資本主義」・「組織国家」へ移行 [cf. Sombart 1909]

+ 戦時統制経済 = 「国家社会主義 (Staatssozialismus)」というユートピアの実現

⇒ 「ドイツの経済的信条は...将来の中欧の特徴となるべきである。そうすれば...結束した一つの経済folk [中欧経済folk (das mitteleuropäische Wirtschaftsvolk)] が形成される。」

◎経済を前面に出して統合していけば、民族間の差異・対立を弱めることができるのみならず、新しい
フォルク（民族／人民）を創り出すこともできるという確信
+ ドイツ経済に対する自負心 →他の中欧諸民族に対する経済的優越感

c) 統合の手法 ⇒経済領域を出発点として選択

⇒統制経済の経験から引き出された「備蓄経済」と「シンジケート」によって補完された「関税同盟」
←文化・言語問題には介入せず、機能主義的・漸進主義的な方法による統合を企図
→中欧に統合されるべき領域は、経済・軍事・外交のみ
◎宗派やナショナリティが異なっても、経済と防衛についてなら一つにまとめられるという確信

4) 「中欧史」の構築：ナウマンと歴史の問題

・新しいアイデンティティ（＝「中欧人（Mitteleuropäer）」）を構築する必要性の認識
→中欧のための「新しい歴史意識」の創出を主張 →プロイセン史学批判
→過去に対する「理解」と「忘却」+「中欧史」の構築
e.g. 多民族帝国としての神聖ローマ帝国の強調

◎ナウマンの思考様式＝現在を歴史の視座で見ると共に、過去を現在の問題意識で読み直す
→大戦が「中欧」という空間を開いたとき、ナウマンの眼に映ったのは、中央ヨーロッパに堆積した厚
い歴史の層

5) 「中欧」の拡大：『ブルガリアと中欧』を中心に

・ブルガリアの参戦とポーランド問題 ⇒「中欧」構想が戦争の過程に従属していく
e.g. 『ブルガリアと中欧（*Bulgarien und Mitteleuropa*）』（1916年夏）
・中欧の拡大：「中欧はバルカン半島と結合する」 ←バルカンは中欧にとって「第一級の陸路」
・「新バルカン連合」の提唱
：「全てのナショナルなものは分権的に、全ての通商的なものはバルカンの、全ての軍事的なものは
中欧的に扱われねばならない」 ⇒重層的な中欧＝バルカン秩序構想

◎「中欧」の帝国主義的性格、権力政治的な発想は強化
⇒戦争に引き摺られながら、「中欧」という名の「ドイツ」中心主義へ

6) 小括

・ナウマンの「中欧」は、世界大戦というドイツの危機の時代に登場した、狭義のナショナリズムの否
定を伴う、ドイツ・ナショナリズムの一変種
←重要なことは、中央ヨーロッパに堆積した長い歴史に支えられた運命共同体として表象されること
+「ドイツ性」を中核としながらも、多様なナショナリティが共存しうる共同体という未来像を提示

◎but ナウマンの「中欧」はあくまでも「戦争の果実」 ⇒戦況の後追的な理論化・正当化に
⇒ナウマンの「中欧」理念は、彼のドイツ・ナショナリズムと第一次大戦の過程が生んだ史的産物

3. 「中欧」の現実——『中欧論』の反響の諸相

0) 反響の理由 : ①自由主義左派の代表的論客としてのナウマンの知名度 [Krey 2000]

②出版のタイミング = 「戦争目的」論争の切迫

③自由主義派の凝集核という国内政治的意味 [Taylor 2001]

④主張の明確さと細部の曖昧さ → 様々な読み方可能

1) ドイツ国内

・批判 : ①社会民主党左派 e.g. ヒルファディング…権力政治的側面を批判 [cf. 河野 1987]

②全ドイツ派 : 「スープレナショナルな中欧ではなく、より広大なドイツを第一に」

・賛同 : リベラルさを賞賛される一方で、ドイツの覇権を要求する者たちも歓迎

2) オーストリア・ドイツ人

「ナウマンほどオーストリアで賛美されたドイツの政治家はいなかった」(シュトレゼマン)

← 「ドイツ・ナショナル」(e.g. フリートユンク) / 「オーストリアの使命」(e.g. シュトルパー)

Cf. カール・レンナー…①経済領域の拡大、②対ロシア、③ドイツ文化の優越性、から支持

○ナウマンの「オーストリア的」「中欧」と、オーストリア・ドイツ人のアイデンティティとの親和性

*非ドイツ系ナショナリティの反応も多様

←各々の経済的・社会的な発展度、二重君主国の政治への関与のあり方、地政学的環境の相違

+ 各エリートたちは、ナショナルな目標と並んで、常に自己の経済的な利益も考慮

3) ハンガリー (マジャール人) cf. Diószegi 1995

○アウスグライヒによって既に君主国内で一定の自律を獲得しており、その立場から「中欧」を考慮

・受容の特徴 = 完全拒否か全面賛成

・首相ティサ (Tisza István) : 「中欧」をオーストリア中央集権主義の復活とみなす (⇔Andrássy Gyula)

・利益集団 : ハンガリー工業家同盟の賛成 ⇔ 関税によって保護されてきた農業家たちは拒否

・ヤーシ・オスカル (Jászi Oszkár) らブルジョワ急進党や、サボー・エルヴィン (Szabó Ervin) ら社会民主党の人々は、自由主義的な「中欧」によるハンガリーの社会構造の変革に期待 [cf. Valiani 1973]

⇔汎ゲルマン主義の危険を訴える左派知識人も多い e.g. Ágoston Péter

4) チェコ人 cf. Kopyś 2000; Kořalka 1995; Jaworski 2001

○第一次大戦は、チェコ人のナショナル・アイデンティティとチェコ社会の利益を、中央ヨーロッパにおけるドイツ帝国の権力政治的・経済的な優越性とどう調和させるかという困難な問題をチェコ人に突きつける

⇒大抵のチェコ人エリートは「中欧」に反対

・ドイツ帝国の工業との競合に対する恐れ (金融業も同様)

・政治家たちのパラツキー (František Palacký) 的思考 (ハプスブルク内で自らの地位の強化を図る)

⇔シュメラル (Bohumír Šmeral : チェコスラヴ社会民主党の指導者) らのグループ

→反チェコ的なドイツ・ナショナリズム (特にオーストリア・ドイツ人のもの) を牽制するために、ドイツ帝国のリベラルや左派を味方につけようと試みる ⇒ナウマンとの協働へ

⇨マサリクら亡命政治家たち：協商国側における『中欧論』のネガティブな受容に多大な寄与
e.g. マサリクの *The New Europe* ←「中欧」の対抗理念としての「新しいヨーロッパ」
：「中欧」＝「汎ゲルマン主義」＝ドイツの「東方への迫進（Drang nach Osten）」として描き出す

5) ポーランド人

○戦争に翻弄されるなか、宿願であるネイションの統一と、独塊露に挟まれた地政学的条件とをどう和解させるかという視点で、「中欧」を眺める

*ナウマン…1916年以降、「オーストロ・ポーランド的解決」の支持者に

*ガリツィアの政治家たち（特にポーランド社会民主党）は、ナウマン的な「中欧」に期待

*旧ロシア領の政治家たち→「中欧」がロシアに対する砦を提供すると考える e.g. Władysław Studnicki

⇨ドモフスキ（Roman Dmowski）ら国民民主党（エンデツィア）の亡命指導者たち

：「中欧」はドイツ帝国主義の表現であり、ドイツ人の本質的「衝動（Drang）」であると批判 [Meyer 1996]

○非ドイツ系ナショナリティの多くは、「中欧」に潜むドイツ・ナショナリズムに敏感に反応し、反発
←それでも、統合を経済と防衛（ロシア要因が大きい）の領域に限定すればナショナリティの壁を超えうるというナウマンの計算が、相当数の者を惹き付けたのは、注目に値する

6. 小括

*第一次大戦期の議論：「中欧」という言葉を普及させ、さらにそれに多様な意味内容を付与

←20世紀の「中欧」をめぐる議論の基調に

・ドイツ・ナショナリズムに与えた影響も大 e.g. 東方ドイツ人の「再発見」 cf. Conze 1965; Nelson 2002

4. おわりに

*ドイツと「中欧」の事例の「面白さ」

①中央ヨーロッパという「ネイション」が混交した地帯と、ドイツ・ナショナリズムとの相克
←「中欧」構想の原動力 ←「国民国家」の創出は不可能であるという認識

②神聖ローマ帝国への追憶や、それに基づく「ライヒ（Reich：帝国）」の理念

③ハプスブルク君主国という「多民族共存の実験場」の存在

④連邦主義という「伝統」 cf. Umbach 2002; Langewiesche & Schmidt 2000

⑤ドイツ関税同盟（1834年）の経験 cf. 遠藤・板橋 2008

⑥ユダヤ人の両義的な役割

※本報告の事例部分について詳しくは、拙著『中欧の模索——ドイツ・ナショナリズムの一系譜』（創文社、2010年）の第3章を参照されたい。

<引用・参考文献一覧>

- Andler, Charles (1915), *Pan-Germanism. Its Plan for German Expansion in the World*, trans. by J.S., Paris: A. Colin.
- Ash, Timothy Garton (1989), *The Uses of Adversity. Essays on the Fate of Central Europe*, New York: Random House.
- Bennhold, Martin (1992), "Mitteleuropa -eine deutsche Politiktradition. Zu Friedrich Naumanns Konzeption und ihren Folgen," *Blätter für deutsche und internationale Politik*, Bd.37, Heft.8, S.977-989.
- Brandt, Harm-Hinrich (1996), "Von Bruck zu Naumann. „Mitteleuropa“ in der Zeit der Paulskirche und des Ersten Weltkrieges," in: Michael Gehler / Rainer F. Schmidt / Harm-Hinrich Brandt / Rolf Steiniger (Hg.), *Ungleiche Partner? Österreich und Deutschland in ihrer gegenseitigen Wahrnehmung*, Stuttgart: Franz Steiner, S.315-352.
- Brechtfeld, Jörg (1996), *Mitteleuropa and German Politics. 1848 to the Present*, Basingstoke: Macmillan.
- Bruch, Rüdiger vom hg. (2000), *Friedrich Naumann in seiner Zeit*, Berlin/New York: W. De Gruyter.
- Busek, Erhard u. Gerhard Wilflinger hg. (1986), *Aufbruch nach Mitteleuropa. Rekonstruktion eines versunkenen Kontinents*, Wien: Edition Atelier.
- Carr, E.H. (2001), *The Twenty Year's Crisis. An Introduction to the Study of International Relations*, with a New Introduction by Michael Cox, London/New York : Palgrave.
- Conze, Werner (1963), *Die deutsche Nation. Ergebnis der Geschichte*, Göttingen: Vandenhoeck&Ruprecht (木谷勤訳 『ドイツ国民の歴史——中世から現代まで 歴史の成果』 創文社、1977年).
- Dahrendorf, Ralf (1994), "Friedrich Naumann. Der politische Volkserzieher," in: ders., *Liberale und andere. Portraits*, Stuttgart: Deutsche Verlags-Anstalt, S.151-159.
- Diószegi, István (1995), "Die Reaktion Ungarns auf die deutschen Mitteleuropa -Konzeptionen," in: Plaschka (1995), S.63-65.
- Droz, Jacques (1960), *L'Europe centrale. Évolution historique de l'idée de "Mitteleuropa"*, Paris: Payot.
- Erbödy, Gábor hg. (2003), *Mitteleuropa. Politische Kultur und europäische Einigung*, Baden-Baden: Nomos.
- Fischer, Fritz (1967), *Griff nach der Weltmacht. Die Kriegszielpolitik des kaiserlichen Deutschland 1914/18*, Sonderausgabe, Düsseldorf: Droste (村瀬興雄監訳 『世界強国への道——ドイツの挑戦、1914-1918年』 上下、岩波書店、1972/83年).
- Frölich, Jürgen (2000), "Friedrich Naumanns „Mitteleuropa“: Ein Buch, seine Umstände und seine Folgen," in: Bruch hg. (2000), S.245-267.
- Hannak, Jacques (1965), *Karl Renner und seine Zeit. Versuch einer Biographie*, Wien: Europa.
- Hantsch, Hugo (1965), "Österreich und Mitteleuropa," *Bohemia*, Bd.6, S.390-399.
- Heuss, Theodor (1949), *Friedrich Naumann. Der Mann, Das Werk, Die Zeit*, 2. neubearbeitete Aufl., Stuttgart/Tübingen: Rainer Wunderlich Verlag Hermann Leins (zuerst 1937).
- Jaworski, Rudolf (2001), "Friedrich Naumann und die Tschechen," in: Hans Mommsen u.a. (Hg.), *Der Erste Weltkrieg und die Beziehungen zwischen Tschechen, Slowaken und Deutschen*, Essen: Klartext, S.241-254.
- Kann, Robert A. (1950), *The Multinational Empire. Nationalism and National Reform in the Habsburg Monarchy, 1848-1918*, 2 vols., New York: Columbia U.P.
- Kapp, Richard W. (1984), "Divided Loyalties. The German Reich and Austria-Hungary in Austro-German Discussions of War Aims, 1914-1916," *Central European History*, vol.17, pp.120-139.
- Kluke, Paul (1965), "Deutschland und seine Mitteleuropapolitik," *Bohemia*, Bd.6, S.373-389.
- Kopyś, Tadeusz (2000), "Die Haltung der tschechischen und polnischen politischen Eliten zur Mitteleuropa-Konzeption Friedrich Naumanns," *Bohemia*, Heft 41/2, S.326-342.

- Kořalka, Jiří (1995), "Anpassung oder Widerstand? Zu den tschechischen Reaktionen auf die deutsche Mitteleuropaidee vor und nach dem Jahre 1914," in: Plaschka (1995), S.25-38.
- Krey, Ursula (2000), "Der Naumann-Kreis. Charisma und politische Emanzipation," in: Bruch hg. (2000), S.115-147.
- Kundera, Milan (1983), "Un Occident kidnappé ou la tragédie de l'Europe centrale," *Le Débat*, novembre 1983 (里見 達郎訳「誘拐された西欧——あるいは中央ヨーロッパの悲劇」『ユリイカ』1991年2月号、62-79頁)
- Langewiesche, Dieter u. Georg Schmidt hg. (2000), *Föderative Nation. Deutschlandkonzepte von der Reformation bis zum Ersten Weltkrieg*, München: Oldenbourg.
- Le Rider, Jacques (1996), *La Mitteleuropa*, 2^e édition corrigée, Paris: Presses Universitaires de France (1^e éd. 1994) (田口晃・板橋拓己訳『中欧論——帝国からEUへ』白水社、2004年).
- Masaryk, Tomáš G. (1918), *The New Europe. The Slav Standpoint*, London (For Private Circulation).
- Meyer, Henry Cord (1955), *Mitteleuropa. In German Thought and Action 1815-1945*, The Hague: Nijhoff.
- Meyer, Henry Cord (1996), *Drang nach Osten. Fortunes of a Slogan-concept in German-Slavic Relations, 1849-1990*, Bern: Peter Lang.
- Milatz, Alfred (1957), *Friedrich-Naumann-Bibliographie*, Düsseldorf: Droste.
- Mommsen, Wolfgang J. (2004), "Die Mitteleuropaidee und Mitteleuropapläne im Deutschen Reich," in: ders., *Der Erste Weltkrieg. Anfang vom Ende des bürgerlichen Zeitalters*, Frankfurt a.M.: Fischer, S.94-117.
- Naumann, Friedrich (1914), *Deutschland und Frankreich*, Stuttgart/Berlin: Deutsche Verlags-Anstalt.
- Naumann, Friedrich (1964-69), *Werke*, 6 Bde., Köln/Opladen: Westdeutscher Verlag.
- Nelson, Robert L. (2002), "'Unsere Frage ist der Osten.' Representations of the Occupied East in German Soldier Newspapers, 1914-1918," *Zeitschrift für Ostmitteleuropa-Forschung*, Bd.51, S.500-528.
- Plaschka, Richard G., u.a. Hg. (1995), *Mitteleuropa-Konzeptionen in der ersten Hälfte des 20. Jahrhunderts*, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Rühmkorf, Christian (2000), "„Volkswerdung durch Mythos und Geschichte“. Die deutsch-slawischen Beziehungen bei Friedrich Naumann und T.G.Masaryk," *Bohemia*, Heft 41/2, S.295-325.
- Schlögel, Karl (2002), *Die Mitte liegt ostwärts. Die Deutschen, der verlorene Osten und Mitteleuropa*, München/Wien: Carl Hanser Verlag (zuerst Berlin: Corso bei Siedler, 1986).
- Sombart, Werner (1909), *Die deutsche Volkswirtschaft des 19. Jahrhunderts*, 2.Aufl., Berlin: Georg Bondi.
- Stern, Jacques (1917), "Mitteleuropa." *Von Leibnitz bis Naumann über List und Frantz, Planck und Lagarde*, Stuttgart/Berlin, Deutsche Verlags Anstalt.
- Stirk, Peter M.R. (1996), *A History of European Integration since 1914*, London: Pinter.
- Stirk, Peter M.R. ed. (1994), *Mitteleuropa. History and Prospects*, Edinburgh: Edinburgh U.P.
- Taylor, A.J.P. (2001), *The Course of German History. A Survey of the Development of German History since 1815*, with a new introduction by Chris Wrigley, London/New York: Routledge (1945).
- Theiner, Peter (1983), *Sozialer Liberalismus und deutsche Weltpolitik. Friedrich Naumann im Wilhelminischen Deutschland (1860-1919)*, Baden-Baden: Nomos.
- Thörner, Klaus (2000), 'Der ganze Südosten ist unser Hinterland.' *Deutsche Südosteuropapläne von 1840 bis 1945*, Diss., Universität Oldenburg.
- Thoß, Hendrik hg. (2006), *Mitteleuropäische Grenzräume*, Berlin, Duncker&Humblot.
- Umbach, Maiken ed. (2002), *German Federalism. Past, Present, Future*, Basingstoke: Palgrave.
- Valiani, Leo (1973), *The End of Austria-Hungary*, trans. from Italien (Milano, 1966), London: Secker&Warburg.

Verosta, Stephan (1977), "The German concept of *Mitteleuropa*, 1916-1918 and its contemporary critics, in: Robert A. Kann et al. (eds.), *The Habsburg Empire in World War I*, New York: Boulder, pp.203-220.

Villain, Jörg (1977), "Zur Genesis der Mitteleuropakonzeption Friedrich Naumanns bis zum Jahre 1915," *Jahrbuch für Geschichte*, Bd.15, S.207-215.

Zimmermann, Moshe (1982), "A Road not Taken. Friedrich Naumann's Attempt at a Modern German Nationalism," *Journal of Contemporary History*, vol.17, pp.689-708.

アーレント、ハナ (1972) 『全体主義の起源 2 帝国主義』大島通義・大島かおり訳、みすず書房

遠藤乾・板橋拓己 (2008) 「ヨーロッパ統合の前史」遠藤乾編『ヨーロッパ統合史』名古屋大学出版会、20-53 頁

小野塚喜平次 (1916) 「ナウマンの中欧論を読む」『国家学会雑誌』第 30 巻第 7 号 (同『現代政治の諸研究』岩波書店、1926 年、1-36 頁に再録)

川合全弘 (2003) 『再統一ドイツのナショナリズム——西側結合と過去の克服をめぐる』ミネルヴァ書房

河野裕康 (1987) 「ヒルファディングと中欧構想」『社会思想史研究』第 11 号、北樹出版、177-193 頁

栗原優 (1994) 『第二次世界大戦の勃発——ヒトラーとドイツ帝国主義』名古屋大学出版会

小林純 (1991) 「経済統合の系譜——ナウマン『中欧論』によせて」田中豊治他編『近代世界の変容——ウェーバー・ドイツ・日本』リブレポート、89-111 頁

今野元 (2003) 『マックス・ヴェーバーとポーランド問題——ヴィルヘルム期ドイツ・ナショナリズム研究序説』東京大学出版会

今野元 (2007) 『マックス・ヴェーバー——ある西欧派ドイツ・ナショナリストの生涯』東京大学出版会

篠原琢 (1996) 「中央ヨーロッパ——その高度な政治性」『地理』第 41 巻 5 号、38-46 頁

篠原琢 (1998) 「マサリクと「新しいヨーロッパ」——主体としての「国民」と「中央ヨーロッパ」の多様性」北海道大学スラブ研究センター編『地域と地域統合の歴史認識 (その 3) 中欧とバルカン』、1-31 頁

杉原達 (1990) 『オリエントへの道——ドイツ帝国主義の社会史』藤原書店

高橋和 (1990) 「社会主義者のジレンマ——ボフミール・シュメラルとチェコスロヴァキア独立運動」羽場久ミ子編『ロシア革命と東欧』彩流社、43-60 頁

建部遯吾 (1917) 「ナウマン氏『中欧帝国』」『日本社会学院年報』第 5 年、666-667 頁

戸澤英典 (2003) 「中東欧 EU 加盟の世界史的意味」『海外事情』2003 年 10 月号、53-63 頁

羽場久泥子 (1990) 「ハンガリー近代における知識人と「民族」——ヤーシ・オスカルの中欧連邦構想」同編『ロシア革命と東欧』彩流社、113-138 頁

林忠行 (1983) 「チェコスロヴァキア独立運動の理念——T・G・マサリクの主張をめぐる」『共産主義と国際政治 [季刊]』、第 7 巻 4 号、19-37 頁

林忠行 (1993) 『中欧の分裂と統合——マサリクとチェコスロヴァキア建国』中公新書

松本彰 (1999) 「<ヨーロッパの中のドイツ>意識の歴史的展開——対西欧・中欧・対南欧」『西洋史研究』第 28 号、93-102 頁

三宅正樹 (1961) 「世界政策と中欧理念——F・ナウマンとドイツの政治」日本政治学会編『年報政治学 1961: 現代世界の開幕』岩波書店、37-56 頁

三宅正樹 (1999) 「ベルンライターと「中欧」経済同盟計画——崩壊前夜のオーストリア・ハンガリーにおけるウィーンの一政治家の苦闘」同編『ベルリン・ウィーン・東京——20 世紀前半の中欧と東アジア』論創社、73-147 頁